

# News Letter



■2012年11月29日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は11件が採択されました。本号では、シリーズ第2回として、教育学部松浦均先生の「人間行動の法則発見」におけるPBL教育の実践報告を掲載します。

## 2012年度開講 「PBL教育支援プログラム」成果報告 (2)

### 「人間行動の法則発見」

#### はじめに

24年度前期におこなった共通教育PBLセミナー授業について報告する。

本セミナーは「人間行動の法則発見」というテーマを設定して、普段の日常の中から人間の社会的行動の法則性を見つけ出すことを目的としている。いわゆる経験則として知っていることが本当になのかどうか、あるいは日常のふとした疑問について、これらのことを実際に観察して確かめてみようという訳である。具体的には、PBL方式であるので、自ら問題設定をして、観察計画を立てて、実際にフィールドに出て実証観察を行う。経験則として理解していることや自分たちが立てた仮説が確かめられれば、それはその通りであるし、確かめられない場合は、経験則と思っていたことが誤った理解なのか、また別の法則性があるのか、さらに検討を進めることになる。

このようなことは、大学で学問を修得する上で、基本的なものの見方や、対象に迫るアプローチの仕方についての基礎的なプロセスであると考え、したがって、本セミナーでは、ものごとを「単純に「見る」というもっとも基本的な作業に重きを置いている。学生たちは、今後それぞれの学部でもっとも高度な専門的な学習をしていくわけであるが、もっともシンプルな「見る」ことにこだわった授業展開を行ってきた。

#### 授業の概要

##### ①練習課題

入学後間もない1年生がグループを組んで、いきなり研究課題を設定するのは大変困難であるので、最初は練習課題を設定し、実際に「観察」を経験してもらうことから始めた。23年度PBLセミナーと同じ課題で、三重大学構内の自転車の台数を把握する課題である。具体的には5つのグループに分かれて担当エリア内に駐輪されている自転車の台数を単純に数えることであるが、学部や場所によって台数は異なるのか、駐輪の仕方には何か特徴はあるのか、学生の乗っている自転車のタイプ、スタンドロックの有無、指定場所への駐輪状況等の様々な観点から検討した。ちなみに学内の自転車の駐輪台数は以下の通りである。5月のGW中とあって台数の変動は大きいですが、それはそれで理由が有り、様々な観点から読み取れる事項を考察し、各グループで全体状況に関する報告書を作成させた。

##### ②本課題(テーマの立案から観察実施まで)

本課題は、グループ毎に自分たちでテーマを設定し、実際に観察を行ってデータを取り、それを分析し、報告書を書くという、いわば一連の研究の実行である。テーマ設定にあたっては、大学生活において身近なところでの人間行動に着目すること、大学内での観察実施が可能なこと、観察してみな

Table1 三重大学校内の駐輪台数

観察日時	正門～教育学部エリア	教育学部2号館～生物資源学部エリア	人文学部～図書館～三翠ホールエリア	工学部エリア	医学部～付属病院エリア	その日の総計
23年5月2日(月) 13:30	656	1296	736	985	723	3411
23年5月9日(月) 13:30	642	1107	978	1136	1062	4925
24年5月2日(水) 15:00	493	810	285	796	347	2731
24年5月7日(月) 13:30	1005	1298	562	1715	627	5207

Table2 各グループの観察テーマと結果の概要

グループ	テーマ	得られた結果の概要
Aグループ	じゃんけんの出し方の法則性	1回目に出すものに偏りがあり、さらに2回目に出すものとの連関があった。(いずれも統計的に有意)。学部間の相違は見られず。
Bグループ	授業の空きコマにおける構内共用スペースの利用のされ方	構内5箇所の共用スペースにおいて、どのような利用のされ方がなされているか丹念に調べた。午前午後での利用方法の違い、利用人数の傾向、場所による特性などが明らかになった。
Cグループ	落とし物を見つけたときの行動	路上に落ちている鍵あるいは紙袋を見つけた学生が(無視した学生も多数)それをどうするか観察と行動した者にインタビューをした。心理学における援助行動研究の一環として、拾う意思があっても、その後の行動には大きな躊躇が見られた。
Dグループ	登校時の正門前でのハイタッチ行動	最近いろんなところで見られる「ハイタッチ運動」(日本ハイタッチ協会監修)を実行し、コミュニケーションの観点から本学学生の「ハイタッチ」への参加状況を3週にわたり観察した。男女差、経験による参加率向上などが見られた。
Eグループ	共通教育棟1階正面玄関(自動ドア、手動ドア)の利用傾向	建物に入る場合と、出る場合による相違、自動ドア利用か手動ドア利用かにおける法則性の有無を観察した。どちらから来てどちらへ行くか行動パターンをカテゴリーとして分析した結果、利用の仕方に関する傾向性が見られた。

ければ本当のところはわからない問題、そもそも観察実行が可能かどうか等の観点から、2W(4コマ分)ほど議論してテーマを決定した。議論の過程では、担当教員とTAがサポートした。テーマが決定すれば、今度は観察計画の立案に入る。観察実施場所の下見、具体的な観察カテゴリーの設定、記録用紙の作成、役割分担の確認、観察のリハーサル等を行わせ、観察本番に向けての下準備を整えた。その後、3W分を観察実施期間として設定し、教室外、屋外での観察実施を行った。授業時間外のものもあるが、グループ内で空き時間を調整しながら観察が実施された。ちなみに今年度の各グループの観察テーマと得られた結果の概要はTable2の通りである。

きわめてシンプルなテーマもあれば、手の込んだ観察もあった。またアクションリサーチ的な実験もあったが、いずれも面白い結果が得られたと考えている。データは数量化し、1年生ではあるが統計的な分析も適宜必要な場合には指導した。

### ③発表と報告書作成について

発表会は心理学系のPBLセミナー合同で行い、レジメとプレゼンテーション用スライドを作成し臨んだ。発表の仕方も、各グループで自分たちの研究とその結果がいかに関わりよく伝わるかアイデアを出し合い、面白く、わかりやすい発表を目指した。最終的には、1つのグループが共通教育交流会において発表し、一連のPBLセミナーの授業を終了した。

本課題は、データは共有しつつ、個人レポートとしてまとめるよう指示し、研究報告書として作成された。全員提出し、単位を認定した。

## まとめ

各グループが設定したテーマは、本物の研究として(彼らのやったことが本物でないわけではないが)やろうと思えば十分やれるものであり、1年生ながら三重大生として大きな力を発揮してくれたと考えている。荒削りな部分があることは否めないがPBLの要件は満たしていると考えている。すなわち、グループでの協働的な活動、自ら深く考える作業、問題の設定、課題の解決等々、必要なプロセスはだいたい踏んでおり、前期終了時間切れ寸前ではあったが、一応の完了を見たとと言える。専門教育に比べれば遊びと見えるような部分もあるかもしれないが、課題に取り組む学生たちのまなざしは真剣であり、(失礼ながら)予想以上に積極的に取り組んでおり感心することも多かった。あと、TAの存在も大きく、授業者だけではここまで学生を引っ張ることができなかったと思う。複数の指導者が必要な授業であると認識している。

最後に、スタートアップセミナーと同様に、本セミナーは大学教育の入門的な授業という位置づけになるのかもしれないが、1人ではできない課題をグループ全員で協力して取り組んでやることの意義や、問題設定して課題解決に向けて取り組んでいくプロセスの面白さを認識してくれれば、こちらの目標も達成できたことになる。彼らの今後の活躍を大いに期待するところである。(松浦 均)

### おしらせ

10月1日付で、本センターに2名の教員が着任いたしました。



#### 下村智子特任講師

学生の皆さんの「学び」を全力でサポートさせていただきたいと思っております！ よろしくお祈りいたします。



#### 大道一弘特任講師

「4つの力」スタートアップセミナーと教職科目を担当します。教授学習心理学(教えと学びの心理学)が専門です。よろしくお祈りいたします。